

佐々木 力氏の戦後段階把握に寄せて

ポスト冷戦研究会 2001年11月24日
福島大学経済学部 後 藤 康 夫

はじめに

科学史を軸とする膨大な著作の中から、ここでは、とくに戦後段階（第二次大戦後の冷戦段階）把握を取り出して、論点を提起することとする。

『科学革命の歴史構造』（岩波書店、85年、講談社学術文庫、95年）
『科学史的思考』（お茶の水書房、87年）
『近代学問理念の誕生』（岩波書店、92年）
『生きているトロツキイ』（東京大学出版会、96年）
『科学論入門』（岩波新書、96年）
『マルクス主義科学論』（みすず書房、97年）
『科学技術と現代政治』（ちくま新書、00年）
『20世紀数学思想』（みすず書房、01年）
『現代世界と『共産党宣言』150周年』（『思想』No.894、98年12月号）

I 戦後帝国主義と生産力展開の独自性をめぐって

- (1) 佐々木氏は、戦後段階は、レーニンの古典的帝国主義段階とは異なるとして、エルネスト・マンデルの著書『後期資本主義』を、核兵器に象徴される戦後生産力のあり方の、マルクス経済学的把握として高く評価する。

マンデルによれば、マルクス『経済学批判要綱』における科学の規定（「すべての科学が資本に奉仕するところにされる。発明がひとつの商売となり、また直接的生産への科学の応用それ自体が、科学にとって規定的な、またこれに刺激を与える視点となる」）が恒常化し、戦後段階に特有なものとなる。そこから、将来は、「生産力が、私的所有、すなわち資本諸関係に適した覆いを脱ぎ捨ててしまう時に初めて、現代科学の中にまどろんでいた革命的潜在力が、物質的、精神的、道徳的領域で、労働の解放、人間の解放のために十分に使用されることになるであろう」と展望される。

他方で、氏は、環境・エコロジー問題を念頭に、いまや「自然生態系が先端科学技術で武装した先進資本主義諸国による収奪の対象」となるに至ったとし、「自然に敵対する帝国主義」と規定する。そこから、社会主義の新たなプログラムとして、「地球的規模での計画性」という

「環境社会主義」を展望する。

- (2) 後者は、最後にまわし、ここでは、前者について言及する。

戦後生産力の独自性把握と将来展望は、全く妥当なものであり、氏自身も、『宣言』の現代的意義として高く評価している。だが、マンデルに語らせるだけで、氏自身の展開がみられないのは、何故なのだろうか。「生産力主義」と評されることへの「回避」なのだろうか。この「回避」こそ、情報革命の展開なかに発見することとなった「思考の道具」としてのコンピュータとインターネットを、「労働の解放」の展望へと繋いでいく論理を、「遮断」することになっているのではないのか。氏自身、ソ連邦・「労働者国家」の崩壊のなかから救い出すこととなった「ソヴィエト・プロレタリア民主主義」、あるいは「経済民主主義」の継承・発展を語りながら、それをマルクスの生産力展開の基本線において展開することを「遮断」することになっているのではないのか。つまり、コミュニンの21世紀的展開への「見失われた環」になっているのではないのか。

II 20世紀の現代科学、あるいは戦後科学の科学史上の位置をめぐって

（資料①参照）

- (1) 氏は20世紀に登場してくる科学を次のように特徴づける。
- ・相対性理論：古典力学と電磁気学のある種の総合
 - ・量子力学：熱学をさらに発展させ古典力学とは異なる概念的枠組みをあたえたもの
 - ・数学：19世紀的発展を総合的に反省、その対象を集合と構造という抽象的概念で構成されているものとする
 - ・分子生物学：生物学の機械論化を徹底して生まれたもの

- (2) こうした把握は、「第三の科学革命」という位置づけになるのである。氏の場合、戦後段階の科学と技術（軍産学複合体）は、「第一の科学革命」（「テクノロジー科学」）ならびに「第二の科学革命」（「科学・大学の制度化」、「科学に基づいた技術」）の延長線上にあり、その全面的展開、として位置づけられている。

他方、周知のように、「自然の階層性」の立場から、20世紀の科学・物理学革命を、「認識対象の極微の世界[原子・電子]から極大の世界[宇宙]への広がり」として、その革命性、不連続・飛躍性を強調する見解

がある。とすれば、氏の「科学革命の論理構造」の核心は、どのようなものとして理解すればよいのであろうか。

III 情報革命・コンピュータ把握をめぐる

- (1) 氏は、コンピュータの数学史的意義を、「フォン・ノイマン革命」と呼ぶべきと提唱し、「数百年に一度の『数学におけるメディアの転換』」あるいは「コンピュータ・メディアによる数学様式の転換」と規定している。

コンピュータの発展史において、現段階を「コンピュータのノイマン型」（プログラム内臓と二進法）段階と規定しうるとすれば、どのような内容として理解すればよいのか。そして、今後の展望は、どのように見透されてくることになるのか。

- (2) コンピュータの社会的意義については、「新たな思考の道具」ならびに「インターネットの軍用から民生への転換、その世界的普及」と指摘している。「思考の道具」という規定からすれば、やはり、「科学的労働」の線上において、展開されるべきであろう。

IV 数学基礎論とモジュール化をめぐる

- (1) 氏は、20 世紀の数学の対象は、「集合と構造という抽象的概念で構成されている」と規定している。資料②によれば、「数学基礎論争」は、「知のモジュール化・パーツ化」を産み落とし、現在、この「モジュール化の方法」こそは、物質的生産・製造業においても、知的生産・ソフトウェア生産・科学的労働においても、その編成原理となっている。フリーソフトのリナックスの開発様式もそれであり、やがて科学も真にパブリックなものになるであろう。

- (2) だとすれば、数学的方法が、「社会と人間」全体を覆いつくすこととなるのであろうか。この場合の数学的方法とは、何を意味し、こうした社会状況をなんと規定したらよいのであろうか

V 社会主義の 21 世紀的展望をめぐる

- (1) 冒頭で言及した環境社会主義を、氏は、ウィリアム・モリスが提唱する「生活の質の高度化」、「生活・労働の芸術化」を引き合いに展開する。
- (2) 周知のように、「機械のもとでの労働からの解放」の方向は、一方は

モリスのいうように「芸術的労働」であり、他方は「科学的労働」であり、二方向は、高次において結合されていくこととなる。

氏がモリスの労働論を引き合いにしたことは、マルクスの「自然と人間との物質代謝」という基礎視点に着眼したものであるとして、大いに評価される。「機械のもとでの労働からの解放」は、モリスの方向だけでなく、氏が高く評価しているマンデルが指摘しているように、「科学的労働」の方向でも、展開していくべきであろう。その手がかりは、すでに氏自身、情報革命のなかに発見した「思考の道具」としてのコンピュータとインターネットに与えられている。その展開が期待される。

おわりに

「自然と人間との物質代謝」という基礎視点から、現状の分析と未来社会の展望を、文学的に試みたものとして、宮沢賢治が想起される。「芸術をもてあ

の灰いろの労働を燃せ」と謳いあげた、1926 年作「農民芸術概論綱要」の着想源は、マルクス、モリス、そしてトロツキーに他ならない。

情報革命の展開と地球的規模での環境問題は、新たな次元での、民衆による草の根的な展開を迫っている。

[資料①]

資本主義の世界史の展開と科学革命の諸相

《ひとつの歴史図式(アメリカに視点をおいた)》(出所: 米外冷戦研究会, 1999年9月25日の岸克巳報告)

14世紀末の文化革命→政治革命(1648、1776、1789)



18世紀末大旋回 産業革命(機械と大工業) — 産業資本確立と近代プロ成立—独自の=資本主義的生産様式=資本による労働の実質的包摂の成立。

19世紀末大旋回 重化学工業化—独占=帝国主義段階へ移行

《ヨーロッパ「旧世界」の危機(→ロシア革命—「戦争と革命の時代」)=同時に「新世界」アメリカの成立【→資本主義のアメリカ的段階の発足—「旧世界」再建(「相対的安定」→冷戦体制包摂)とソ連の「一国社会主義」封じ込め、20世紀型社会主義転化】》

1. I 大戦とロシア革命 — 29年大恐慌—国独資転化

2. II 大戦と中国革命 — 冷戦—大陸の国家米(ソ)「体制的」独占=冷戦帝国主義(冷戦社会主義)へ総括

資本主義経済の統一的世界編制としては最高(→最終)形態(最後の国際通貨体制としてのIMF=ドル体制の意味)
同時に解体と20世紀末大旋回への動軸のbuilt-in(20世紀科学革命と冷戦と軍事IBとの連結=展開線)

20世紀末大旋回 冷戦体制解体と冷戦後世界再編を軸とする新たな「人類史的過渡期」の開始(Net先行—Net対応—Net包摂を基本軌道とし、資本と国家の止揚へと向うそれ、Netにもとづく新しいInternational の再建へ)

《冷戦体制解体の世界史的帰結 — 20世紀型社会主義の終焉と資本主義のアメリカ的段階の終焉【1個の略奪的覇権国家転落、総じて金本位制崩壊(29年大恐慌—)民族国家壊滅(核冷戦体制移行—)の流れを締めくくる資本主義世界「総括」の最後の支柱=防塞の撤去】、同時にME=情報革命と世界市場革命(グローバリゼーション)の世界史的相関の開始》

1. 1971-81-91 冷戦体制解体過程【体制間軍事対抗の強王と体制内統合の負担(「日本化」→「アジア化」の相関)とME=情報化・金融自由化=国際化起動→レーガニズムへの総括(労働制圧とサプライサイド=リストラ、財政から金融への転轍)】

2. 1991-95— ポスト冷戦戦略下での情報=金融革命の新段階移行 — Netの開拓を一大画期とする情報=金融《新世界》の形成、その《新世界》の独占的掌握(「新独占」)をテコにその姿にあわせた(「グローバル・スタンダード」)旧世界の全般的リストラの強制、つまりはこの「人類史的過渡期」の《資本主義=アメリカ的ラウンド》の本格的起動と「21世紀型危機」の開始へ。

岸 克巳

佐々木 カ

(科学・Allgemeine Arbeitと社会的存在形態)

「私的科学的な権威時代」
(古典物理学革命)

「産業革命と国家の科学の時代」

1. 科学革命・近世科学
(機械論的自然主義と自然科学哲学)
(テクノロジー科学)

2. 科学革命・近代科学
(科学・大学の制度化)
(科学に基いた技術)

現代科学

(20世紀物理学革命)

「Net上のコミュニティ形成資本へ」

「Net的生産様式へ」